

Newsletter

June 2025

<http://www.aack.info>

目次

追悼 能田 成さん (2024年6月28日逝去)

能田 成ノーチン追悼

田中昌二郎.....1

ノーチンさん追悼

横山宏太郎.....4

ゴローさんのつぶやき

谷口 朗5

北大山の会チベット調査隊編『チベット紀行トランスヒマラヤを巡る』(いりす 2025年)を読む
斎藤清明6

酒井敏明さんと齋藤惇生さんの追悼文について ..7

事務局だより8

会員動向8

編集後記8

追悼 能田 成さん (2024年6月28日逝去)

能田 成ノーチン追悼

田中昌二郎

呼吸困難になり救急車で入院したと聞いて、信じられなかった。京大オーケストラでホルンを吹いていたし、大学の身体検査で肺活量検査器をバタンと振り切ったと自慢していた程だ。ひよろ長い体型だったが、シャツを脱ぐと筋肉隆々のムキムキマンであった。病名は間質性肺炎で小康を得て退院したが、自宅でも酸素吸入器が離せなかった。見舞ってまたワインで乾杯しようといっていたのだが、2024年6月28日帰らぬ人となってしまった。83歳だった。

彼とは京都府立鴨沂高校山岳部からの付き合いで、一緒に予備校関西文理学院経由の予定コースを辿って入学。彼がホルンを吹いたりして待っていてくれたわけでもないだろうが、山岳部入部は61年の同年兵である。

大概の新入部員は夏の剣合宿のあとは北アルプスの縦走などに出かけるのだが、彼は先輩たちに交じって黒部川源流の岩魚釣り山行に入っ

ている。高校山岳部時代に京都の北山、美濃の沢に親しんだ一寸ひねた新入生だった。彼と山岳部時代に同行した山は少ないが、2回生の秋、吉野コッペさん(故人)、小原バカチさんから誘われて参加した黒部別山沢偵察行は印象深い。岩小屋沢岳西尾根の上で降雪による沈殿の翌朝、朝日に雪が融けだして幾条もの滝となって、黒部別山の岩壁全域を流れ落ちている光景に息をのみ、凄いなーと彼と顔を見合せ、コッペリーダーの好リードで、旧日電歩道の痕跡を横切って下の廊下の流れに降り立って胸をなでおろしたのだった。翌春の剣岳合宿でもノーチンは、黒部川本流から取り付いてガンドウ尾根経由剣岳登頂のパーティーに参加するなど、意欲的に活動していた。

卒業後は1974年にK12登山隊に學術班として参加し、1988年には崑崙學術登山隊長として二隊員の6903m峰初登頂に貢献している。

その時の逸話が面白い。彼の言によればではあるが、遠征隊の現地協力員のストライキが起き、交渉は膠着し双方だんまりの場面となったその時に、西部崑崙の空に一発の怪音が鳴り響いた。一瞬の静寂の後大爆笑に包まれ、それまでの空気が一変し、事態は平和裏に収まったという。彼は自身の“平和（屁わ）外交”と自慢していた。もともと彼はよく放屁したが、よくも重要な場面でうまく出たものだと思う。自然に出たものだったかもしれない。

AACK 山スキー仲間と

特筆すべきは、1975年から始まった山スキーへの入れ込み様である。ニュースレター No.101の甲斐氏の報告によれば、1975年4月の法恩寺山を皮切りに、1982年の笹ヶ峰ヒュッテまで全43回の内、能田成ノーチンは23回に参加している。その中でも1978年5月の剣岳一周スキー行で大感激している。特に大窓からの滑降の感激はその後も消えず、北陸自動車道上の車の中で大窓の斜面を見るたびに「雪の緩むのを待って大窓からエイヤツと急峻な雪面に飛び込み、大岩小岩をよけながら必死に滑る」「あの高度差、あの急斜面を滑り切った。スキー登山でこんなにも達成感に浸れるなんて！」と当時の緊張感を反芻しながら懐かしそうに何遍も話すのだった。

しかし彼はこの山行の為に周到な準備をしていたことを、ニュースレター No.43に載った堀川丸太町のムラカミ靴店の消息を伝える記事で知った。ビブラムを少し薄くして、当時流行のジルブレッタにピッタリ合うように特注兼用靴を発注していたのだ。いかに気合が入っていたかが分かる。自分はザツイ、ザツイと言っていたが案外そうではなかったようだ。

研究生活

山岳部および農学部卒業後は一転して理学部で地質学の研究者となる。巖父忠亮氏は中国古代の天文学・暦の研究者であったそうで、その理学への血が彼を駆り立てたのかもしれない。京都産業大学教授を経て熊本大学教授、更に台湾国立成功大学に赴任する。

2008年にそれまでの研究成果とその過程を平易に解説した「日本海はどう出来たか」を出版した〔叢書・地球発見 12 (株) ナカニシヤ出版〕。

彼は言う。1500万年前 日本列島は回転した、日本海は陥没したのではない、大陸を離れ現在の位置まで移動してきた。それを多大な装置や費用を費やさず、ストロンチウム同位体とネオジウム同位体の放射能測定から証明しようとしたものであると。山岳部時代の経験を生かして東北地方の山地でテント生活を続けながら資料サンプルの収集の旅を続け、それらのサンプルを精密測定するために渡米して満足いく結果を得て、着想以来30年ようやく発表するに至ったという。一読はしたものの、門外漢であり全く理解できないが、その真摯な努力と意思の強さには「エライヤツやなー！」頭が下がった。

ノーチンはなかなかの愛妻家

研究生活との折り合いはどのように付けたのか知らないが、AACK先輩たちとキリマンジャロに登頂後、1996年には故酒井敏明さんが呼びかけたAACKとJACの混成部隊でエクアドルの最高峰チンボラソ 6310 mに登頂している。直子夫人もJAC会員で北山にアルプスに活発に登っていて、1999年には阪本グドさんがマネージしてくれた北米のマウントレニア峰 4290 m登山パーティーに参加し、井上トッキュウさん、小生と夫ノーチン4人でザイルを結んで登頂した。2002年にはモンブラン 4893 mにガイドはいたが、夫婦でザイルを結んで登頂している。また台湾国立成功大学に赴任中の2008年には、故齋藤Yさんを名誉隊長とするJAC京都・滋賀支部隊に現地参加して、台湾玉山・雪山に直子夫人とともに登頂している。資料採取の旅、精密測定のための渡米、熊本大学、台湾成功大学赴任などの不在を、クラシック音楽と山がうまく埋めていたのだろう。

思い出のゆったり山登り

或る残雪期、ノーチンと二人で平瀬の宿に泊まり湯につかってしっかり飲んだ。翌日スキーを担いで、萩町の合掌造りの屋根の葺き替えを眺めながら猿ヶ馬場山を目指したが予定通り届かず、大休止の後ゆっくりゆっくり思い思いの滑りを楽しんだ。

また2006年の夏、田中ジローさんの安曇野の家に泊めてもらい、高校山岳部時代の北山荘での思い出などを話しながら、3人で合戦尾根、大天井経由でブラリブラリと槍に登ったのも楽

しかった。

あんな山登りをもう一度と言いながら叶わぬことになってしまった。



写真1 高校山岳部時代 蓬莱山にて 左から能田、田中、一人置いて堀内コンゴ

ノーチン、永い間付き合ってくれてありがとう！ゆっくり休んでくれ！



写真2 黒沢にて



写真3 劔岳北西面。左の大きい鞍部が大窓、そこから下る白い谷が白萩川（上部）。前山に隠れて、下部は見えない。2024年撮影



写真4 合戦尾根で休憩



写真5 大天井岳頂上にて 撮影者：田中ジローさん



写真6 いざ、モンブランへ 左から能田、田中、能田夫人



写真7 モンブラン登頂後、ゲート小屋テラスで 左から松井オドラさん、能田、田中



写真8 同テラスで 左から田中、松井、ガイド、能田

ノーチンさん追悼

横山宏太郎

能田 成（ノーチン）さんは1961年の京大
山岳部入部だから6年上の先輩である。私が
山岳部下級生のころは山行を共にすることは
なく、お会いする機会もそれほど多くな
かった。失礼ながら、冗談とダジャレの
多い先輩、というのが当時の印象だ
った。上級生によると、ノーチンさん
はマジメの度が強すぎるので、それ
を自分で中和するためにあえて冗談・
ダジャレを連発しているのだ、との
ことだった（真偽未確認）。農学部
を卒業後に理学部地質学鉱物学科に
学士入学されたくらいだから、まじ
めな勉強家の面もお持ちだろうと思
っていた。

いわゆる大学紛争の時期に、理学部
では学科分属制度がなくなった。それ
までは「理学部」一括で入学し、3
回生になるときに各学科に分属する
制度だったが、卒業要件として学科
に所属して卒業論文を書く必要がな
くなったのである。しかし地質学
鉱物学教室、地球物理学教室とい
った組織はなくなったわけではなく、
学生は自分の指向に沿った教室で居
場所（机）をもちょうこともできた。
人気の学科ではどうか知らないが、
地質学、地球物理といった教室では
可能だった。

私のいた地球物理学教室から通り
を渡ると地質学鉱物学教室で、そこ
の一室には同期の甲斐邦男君とノー
チンさんたちがいたので、時々訪
問していた。そこでノーチンさんの
主導で勉強会をやることになり、大
学院生・学生数人のグループに私も
誘われて加わった。Arthur HOLMES
（アーサー ホームズ）著の“Prin
ciples of Physical Geology”の
輪読会である。

たしか「一般地質学」という題名
で3分冊の訳書もすでに出ている
と思うが、それよりも原書を読ま
ねばならない、といわれて買った
分厚い本は、探し出してみると1200
ページ以上、厚さ7cmを超えるポ
リュームであった。どこまで、ど
れくらい読んだのかも覚えていな
いが、すくなくとも、私の地球科
学的興味を、時間的にも空間的に
も広げることに役だっ

たと思っている。勉強会に誘って
くれたノーチンさんにあらためて
感謝したい。

著者ホームズさんは、放射年代測
定の始祖のような人で、ながく忘
れ去られ、あるいは無視されていた
アルフレッド・ウェグナーの大
陸移動説を、マントル対流という
駆動システムを与えて蘇らせた
人でもある。それが後にプレート
テクトニクスに発展する。

勉強会のころは、プレートテクト
ニクスに対し、まだ学界でも疑
いの眼を向けるひとがいた時代
ではないかと思うのだが、いまは
ニュース番組で大地震の発生機
構としてプレートの動きが普通
に紹介されている。ノーチン
さんの先進性を示すエピソード
である。

この本が選ばれたのは、地球科
学の基本となるべき新しい考
え方に基づくからだろうが、既
成権威への反発がおおきな流れ
となっていた当時の大学の雰
囲気にもよく合ったのかもしれ
ない。

ノーチンさんの著になる「日本
海はどう出来たか」という本が
ある。旧い学説では、日本海は
陥没によってできたとされて
いた。しかしノーチンさんは
日本各地の岩石サンプルを収
集して放射年代を測定し、研
究仲間の古地磁気の研究成
果と合わせて検討して、新
しい学説に至る。西南日本
が時計回りに、東北日本は
反時計回りにそれぞれ回
転し、大陸との間が開いて
日本海ができたという説
である。この本は研究の
結果だけではなく、岩石
サンプルの採集旅行の様
子や、カリフォルニア理
工科大学での研究・分
析の日々も軽妙な文章
で綴られている。これ
はノーチンさんの「地球
科学的自伝」と言える
だろう。

1970年代後半から80年代は、
岩石試料の採集やその年代測定
を熱心に続けられた時期になる
のだが、同じころ、岩坪ゴロー
さん、荻野ヤンボーさんを中心
にAACK有志のスキー山行が
だんだん活発になり、ノーチン
さんも甲斐も有力メンバーだ
った。私も何度も参加した。近

くの日帰りもあったが、テント泊のときもあった。あたりまえだが皆若く、テントでの酒盛りも盛大だった。そこででもノーチンさんの冗談ダジャレが飛び出し気持ちのよい酔いをさらに加速した。この辺りの様子は、ノーチンさんの筆になる AACK Newsletter の記事 2 編（文末に紹介）でお分かりいただけると思う。

ハイライトはやはり私もご一緒した剣一周スキー山行（1978 年 5 月）だろう。これは天候にも恵まれ、計画通りに完遂できた。剣沢を滑り、小黒部谷上部を滑り、そしてクライマックスは大窓からの滑降である。白萩川・中仙人谷に滑り込む。上部は傾斜が強く、また雪面にちらばる大小の落石に気を使ったが、谷筋をずっと馬場島まで滑り降りることができた。最近見かける記録では、途中雪が割れて苦勞しているケースもある。私達は幸運にもたいへんよい雪の状態にたまたま行き会ったということだろう。メンバーはみな満足感と達成感を存分に味わった。

滑り降りた白萩川は、富山付近の鉄道や高速道路からよく見える。ノーチンさんにとっても、特に思い出に残る山行だったようで、あたりを通るときには、「白萩川」「白萩川」と楽しみにしておられたと聞く。

私にとっては元気なノーチンさんしか記憶になかったの、訃報にはほんとうに愕然とした。富山から剣を見れば左手に大窓の科尔、そして

そこから真っ白・まっすぐに下る白萩川。これからはその眺めに、ノーチンさんの笑顔が重なって見えることだろう。

ここからご冥福をお祈りいたします。

参考

Arthur HOLMES (1965), “Principles of Physical Geology” Second Edition, NELSON

能田 成 (2008)、「日本海はどう出来たか」ナカニシヤ出版

AACK Newsletter No.43 (2007)「ムラカミさんへのメッセージ」

AACK Newsletter No.101 (2022)「70 年代のスキー山行」



写真 大窓から白萩川を滑る 剣一周スキー山行、1978 年 5 月

ゴローさんのつぶやき

谷口 朗

京都大学芦生研究林（芦生演習林）99 年間の土地借約契約の切れる 2021 年を目前にして故岩坪五郎教授が「芦生演習林を護る会」を提唱され、ML への登録と用途限定での大学への寄付を要請された。そのおり笹ヶ峰会メールを通じて「会員神山さんの兄上の関係で大口径の可能性があるかも」とのつぶやきがあった。

神山義明さんにお聞きしたところこの話は間違いないこと判明した。医師で京都大学にも関係のあった篤志家の話でその取りまとめを神山さんの実兄神山和彦氏が担っておられるとのことであった。

受け皿は当時の芦生研究林の責任者であった徳地直子教授が中心となり双方の条件が詰められ、大口寄付は京都大学芦生研究林 資料館「斧蛇館」のリニューアルとなって具体化した。

2024 年 6 月リニューアルオープンされた資料館の入り口近くに「渡邊玲子様 その他芦生研究林への寄付者」としてパネルが設置されている。

篤志家 渡邊士乃武様の遺志は玲子夫人が引き継いでおられる。

「つぶやきその後」

80歳を超え私の山歩きは里山と呼ばれる超低山となりその自然保護にも目をむけるようになった。私の故郷は京都の乙訓である。長岡京市在住の西山孝さんから情報を得て「乙訓の自然を守る会」に入会し会誌でその活動を拝見していた。

芦生の寄付も実現したので他に良い対象は無いかとの話を神山さんから受けた。

NPO法人「乙訓の自然を守る会」は光明寺裏の雑木林を「蝶の森」と名付け、ウラジロミドリなど希少種の保護と食草であるナラガシワなどの植樹が一つの柱である。対象林は土地所有者と毎年契約を更新しているが不安定なものであった。その一部でも会の所有となればその

後の活動へのメリットは計り知れない。2022年10月関係者の顔合わせを兼ね光明寺裏の現地を視察した。その後神山和彦氏と宮崎俊一理事長のコンビで地権者との交渉が繰り返され全対象林区（約1万坪）の売買が成立した。寄付も芦生の2倍近い巨額である。その後今年に入りもう一つの活動である小塩山（淳和天皇陵）のギフチョウとカタクリの保護地も土地所有者との間で買い取り交渉が進んでいるようだ。

ゴローさんの一言のつぶやきから想像も出来ない大きな事案が二つも実ったことになる。本当に有り難いたいことである。

ゴローさんこと故岩坪五郎教授に心から感謝しご冥福お祈り致します。

図書紹介

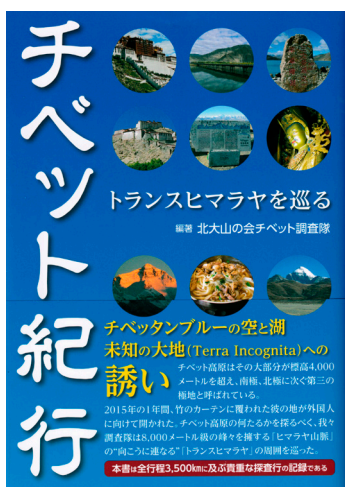
『チベット紀行 トランスヒマラヤを巡る』

北大山の会チベット調査隊 編著

いりす、2025年2月14日発行 240ページ

ISBN978-4-88683-982-4 定価 3,500円 + 税

斎藤清明



北海道大学山岳部OBたちの北大山の会（AACH）調査隊（住吉幸彦隊長）が、2015年にチベットを巡った紀行に、探検・登山史や最近事情を加えて「チベット高原」とはなにかを探り、10年後に本書になった。AACKから

は、調査隊に佐藤和秀、執筆に横山宏太郎（40年前のチョモランマ登山、チベットのランタン・リ）と月原敏博（多田等観の足跡）、佐藤が参加している。

75歳から64歳の7名の調査隊は、チベット国際体育旅游会社の現地ガイドと3台のランドクルーザーでラサを出発。ヤルツァンポ河沿いを西へ、チョモランマ（エベレスト）山麓を経てマナサロワール湖に向って、チベット高原の南縁を走る。

ラサからチョモランマBCまでは3日間で到着。土産物店、食堂、飲み屋、宿屋、郵便局もあるテント村やトイレの汚さも記す。5日目にはマナサロワール湖からナムナニ（グルラマンダータ）を望んだ。そこは、1963年に北大西ネパール遠征隊が「ナラカンカール」をめざして越境したところ。当時の隊員だった渡辺興亜は「あの谷を下りてきた」と感慨にふける。

西チベットの中心地アリには7日間で着き、

大都会だと中国の西部大開発に驚く。帰路はチャンタン高原を6日間で走破。観光客が多くて宿探しに苦労もしながら、ラサまで時計回りに周回。走行距離は計3500キロ余り。

1980年代にチベット登山が開放されて間もなくに訪れたことがある評者には、驚くべき道路の整備ぶりだ。浙江省や福建省ナンバーの最新の乗用車やオートバイが走り回る、中国人のチベット旅行熱も描かれている。但し、制限速度は時速40キロで、検問所も多いようだ。次の検問所に早く着きすぎて時間調整する羽目になることも。これは交通事故防止よりも、外国人旅行者も含め地元チベット人への行動監視システムのひとつだとみる。

本書の半分は、第一編「チベット周回の旅」で占め、第二編「チベットの探検と登山」は、「チベット高原を舞台としたグレート・ゲーム」「宗

教家によるチベット探検史」「探検記に描かれたチベット」「チベット側からのヒマラヤ登山」が、簡潔にまとめられている。

第三編はチベットの「今」として「チベット高原の道路事情」、最後の第四編は「チベットを科学する」。ここでは、「チベット高原地学紀行」と「チベット高原の自然環境」の後に「地図の空白部」と題して「スウェン・ヘディンによるチベット高原探査行」と「トランスヒマラヤ考」で結んでいる。この調査隊の目標に「ヘディンの探検行程を確認すること」があったのだが、そのトレースは難しかったという。

評者も同行したナムナニ先遣隊（1984年）は新疆ウイグル自治区から入ったが、そのルートはヘディン隊のと所々で交差していた。往時をしのびつつ、チベットの変貌ぶりを驚きながら読んだ。

酒井敏明さんと齋藤惇生さんの追悼文について

編集人 横山宏太郎

皆様ご存知の通り、酒井敏明さんは2024年12月3日に、齋藤惇生さんは2025年3月11日に、残念ながら逝去されました。

お二人の追悼文について、編集人に問い合わせが多数寄せられています。また、すでに追悼文の原稿を送ってくださった方もあります。そこで、このお二人の追悼文についてご案内いたします。

まず、暫定的な締め切りを7月31日とします。そこで原稿の集まり具合によって、すべてを同時に掲載するか、あるいは二つに分けて掲載するか、といった方針を決めることにいたします。皆様どうぞ早めのご寄稿をお願いします。また、執筆を予定される方は、メールで編集人にお知らせくださると助かります。よろしく願いいたします。

なお、特にお名前をあげての追悼文募集がなくても、追悼文はいつでも、どなたへのものでも受け付けますので、ご遠慮なくご執筆、ご投稿ください。

どうぞよろしく願いいたします。

原稿作成要領（簡略版）

原稿本文は、一般的な横書き文書の形式で作成してください。長さの制限はありません。原稿の字数・行数は特に指定しません。

ワードプロセッサを用いて作成し、電子メールに添付してお送りいただくのが便利ですが、手書き原稿など紙媒体の原稿でも結構です。

写真や図の原稿は、本文に貼り込まずに、別ファイル、あるいは別紙としてください。写真、図などの説明は、本文の後に、まとめて付けてください。

デジタル写真はファイルサイズを縮小せずに、原本のままでお送りください。

写真なども電子メール添付でお送りいただくのが便利ですが、紙焼き写真もOKです。紙焼き写真の原稿はお返しします。

原稿送り先は、編集人・横山宏太郎です。

事務局だより

5月の連休、笹谷山荘に3泊し上信越の春を満喫しました。1日目は、雪山讃歌発祥の地の鹿沢温泉の南にある湯ノ丸山とそのすぐ西の烏帽子岳に登りました。どちらも2000mを超える山ですが雪はほとんどなく、草木は芽吹き鳥のさえずりも聞こえてきました。遠くには雪をまとった北アルプスが見えます。2日目はその遠見尾根をテレキャビンで途中まで上がり、終点から小遠見山を往復しました。こちらはまだまだ見た通り雪山です。カクネ里を抱えた鹿島槍と武田菱をまとった五竜が目の前です。遠くには槍の穂先も見えます。小遠見山の下りではささやかな山スキーも楽しみました。最終日には、京大ヒュッテを訪れました。ここはまだ2、30cmほどの雪に覆われており黒姫山を背景に小さな桜の木が満開です。帰りに「赤いトマト」で、うど、タラの芽、こしあぶら、ごごみ、ふきのとう等の山菜を買い込み自宅で天婦羅にいただきました。

2025年5月31日(土)、キャンパスプラザ京都2階第一会議室にて、対面とZoomによるウェブ配信のハイブリッドで、2025年度総会が93名の出席(対面、ウェブ、委任状等を含む)を得て開催されました。2024年度事業報告および収支決算、2025年度事業計画および収支予算、役員改選などの議案が、その席上で承認されましたことをお知らせします。詳細はAACKホームページに掲載いたしますので、そちらをご覧ください。

会員動向

訃報

内山敬康 2023年7月14日逝去
井上 潤 2025年3月8日逝去
大竹三雄 2025年4月15日逝去
岩井國臣 2025年4月21日逝去

会員異動

今西 秀明 自宅・電話・メール変更
伊藤 宏範 勤務先変更
牛田 一成 メール変更

編集後記

山々の残雪の筋がだんだん細くなってきました。田植えの済んだ水田では、整然と並んだ稲の苗が育ちはじめています。まだ細い苗よりも水面の割合が大きく、風が吹けばさざなみが立ち、静かなら水面には「逆さ妙高」が映ることもあります。水田の景色としては、黄金の穂波が揺れる秋とならぶ、美しい季節です。

苗を植える間隔は狭すぎても広すぎてもいけません。手植えの時代、目印のついた縄などを使い、苗を植え、育て、米を作ってきました。

このような田植えは重労働ですから、負担を減らすため、田植え機が開発されました。さらに省力化を目指して、「直播(直播きとも)」という方法も使われています。文字通り、水田に種籾を直接播くのです(ドローン利用も)。そうすると、苗代を作り、苗を育て、移植する、という作業が要らなくなります。整然と並ぶ苗は見られませんが、大規模化、低コスト化にも有効です。しかしなかなか普及は進んでいないようです。

米価格の報道が続きます。この美しい水田の稲が順調に育って収穫期を迎えるころには、米価格は落ち着いてほしい。そんなことを思いながら、眺めています。

予定より遅れましたが112号をお届けします。発行時期の正常化に一步前進というところです。著者のみなさま、ありがとうございます。引き続きご協力よろしく願いいたします。

原稿送り先: 横山宏太郎

発行日 2025年6月30日
発行者 京都大学学士山岳会 会長 幸島司郎
発行所 〒606-8501
京都市左京区吉田本町(総合研究2号館4階)
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 竹田晋也 気付
編集人 横山宏太郎
製作 京都市北区小山西花池町1-8
(株)土倉事務所